

幼稚園のカリキュラム・指導計画を通してみる 子ども像と学びに関する考察

坪井貴子*

はじめに

平成元年の幼稚園教育要領の改訂により、幼児教育は遊びを中心として行われ、成果が問われるよりむしろ、子どもが活動に取り組むプロセスや内面の育ちを重視することが示されて久しいが、いまだ活動の成果に目を奪われていたり、特に「読み書き算」やいわゆるお勉強的な内容を保育活動の中心に据えている幼稚園ではなおさら成果主義に陥っているのではないだろうか。また、子どもにとって遊びが重要ということの理解は進んでいるものの、保育実践の場では、遊びにおいて子どもの発達をどのように捉えるのか、遊んでいる子どもの姿をどのように捉えたらよいのか、そして、子どもたちが遊びで「主体的・対話的で深い学び」に至るためにはどのような援助や環境構成が必要なのかといったことの検討は十分になされているとは言いがたいかもしれない。

そこで、本論では、実際にある幼稚園で作成され使用されているカリキュラムと指導計画を対象として、次のことを検証したい。

- ① カリキュラムや指導計画に園による独自性があるか、また教師の願いがどのように反映されているか。
- ② カリキュラムや指導計画に、どのように子ども理解や目指される子どもの姿が反映されているか。
- ③ カリキュラムや指導計画に「資質・能力」や「深い学び」はどのように盛り込まれているか。

1. カリキュラム、指導計画の全体像と概観

まずは検証対象であるカリキュラムと指導計画を用いて、「幼児の実態」「ねらい」「内容」「教師のかかわり」「環境構成」について概観し、そこからどのような保育の姿勢が明らかになるか参照する。この幼稚園は3年保育で各年齢1クラスずつの園である。そして、筆者はこの幼稚園で2018年度と2019年度の2年間に合わせて20回程度保育参観を行った。

(1) カリキュラム、指導計画の概観

紙面の都合上全体を掲載することができないため、文章でカリキュラムや指導計画の構成などについて説明する。

まず、3年間の保育期間中、子どもの育ちを継続的に捉えることができるように、3年間を通して13期に分けられている。そして、各期は「幼児の実態」「ねらい」「内容」「教師のかかわり・環境構成」で構成されている。

この園では幼児の幼稚園生活を総合的に見るための3つの視点として「自分とのかかわり」「ものとのかかわり」「人とのかかわり」を設けてある。これらが表すものや分野、領域との関係(表1)は以下の通りである。

「自分とのかかわり」: 安定感、身の回りの始末、片付け、衛生習慣、身体、自覚

「ものとのかかわり」: 植物、飼育物、自然環境、素材、材料、遊具、音、色や形

* 東海学園大学教育学部

「人とのかかわり」：友達（同年齢、異年齢）、きまり、教師、身近な人

表1 3つの視点と5領域との関係

	健康	人間関係	環境	言葉	表現
自分とのかかわり	◎			◎	◎
ものとのかかわり	◎		◎		◎
人とのかかわり		◎		◎	◎

そして、「ねらい」はこの3つの視点から設定されている。この際、「ねらい」が「幼児の実態」から導き出されたものであることは言うまでもないが、「幼児の実態」については「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の10項目から捉えられている。

(2) 月ごとの指導計画における「内容」と活動について

「内容」は上記の「自分とのかかわり」「ものとのかかわり」「人とのかかわり」に従って、次の10項目に整理されている（表2）。ただし、同じ項目に含まれることでも、子どもの年齢や時期により内容に含まれる範囲や目指される方向性は異なってくる。以下の表では、各年齢1時期の内容を取り上げて、年齢による内容の違いを比較する。その結果、それぞれの内容に関して、年齢が上がると、友達とのかかわりが含まれたり、内容の範囲が広がったり、また子ども自身が行うことが目指されていることがわかる。

以下の内容にはそれぞれ内容に応じた活動例が示されているが、これらはあくまでも想定されるものであり、実際には子どもたちが自発的、主体的に遊びを展開する。そして、当然のことながら、同じ内容項目でも、年齢が違えば活動例も異なる。

表2 10項目の内容と内容の年齢による違い

	3歳児 3期 (10, 11, 12月)	4歳児 7期 (10, 11, 12月)	5歳児 12期 (11, 12, 1月)
A	身の回りの始末が分かり、生活習慣・態度を身に付ける。	身の回りの始末の仕方や衛生習慣・態度を身に付けていく。	身の回りの始末や衛生習慣、態度を身に付けていく。
B	興味、関心を持ったものに対してかかわって遊ぶ。	興味・関心をもったものに自分なりにあるいは友達とかかわって楽しむ。	興味、関心をもってかかわる中で自分なりの目的をもって友達と共に遊ぶ。
C	諸感覚を通して自然と触れ合うことを楽しむ。	諸感覚を通して自然とかかわり試したりつくったりする。	諸感覚を通して自然とかかわって遊ぶ。
D	身体を動かすことを楽しむ。	友達と身体を動かして思いっきり遊ぶ。	身体をしっかり動かしながら簡単なルールを作って遊ぶ。
E	いろいろな友達と同じことをして楽しく遊ぶ。	いろいろな友達と楽しく遊ぶ。	いろいろな友達と協力して楽しく遊ぶ。
F	のびのびと表現して楽しむ。	のびのびと表現して楽しむ。	友達と共にのびのびと表現して楽しむ。
G	異校種、異学年、留学生とのかかわりを楽しむ。	異校種、異学年、留学生とのかかわりを楽しむ。	異校種、異学年、留学生、地域の人とのかかわりを楽しむ。
H	自分なりの目的を持って遊ぶ。	自分なりの目的をもって遊ぶ。	BとHの内容が合わさりBに記載。
I		話しに興味、関心をもち、親しみをもって聞いたり話したりする。	話しに興味や関心をもち、親しみをもって聞いたり話したりする。
J		生活の仕方を知り、生活をつくっていく。	生活の仕方を自分たちで考えて、生活をつくったり、行事に関心をもったりする。

(3) カリキュラムにおける「ねらい」と「内容」及び月ごとの指導計画における「教師のかかわり」「環境構成」—四季の自然とのかかわりを重視した3歳児の生活

ここでは3歳児のカリキュラムと指導計画から自然とのかかわりに関するものを取り上げ、目指されている子どもの姿を浮き彫りにしたい。まず、3歳児のカリキュラム中1期(4, 5, 6月)と3期(10, 11, 12月)の「ねらい」と「内容」を以下に取り上げる(表3)。(下線は筆者が付した。)

表3 3歳児のカリキュラムにおける自然との関わりの例

	1期(4, 5, 6月)	3期(10, 11, 12月)
ねらい	<ul style="list-style-type: none"> ・園生活に慣れ、喜んで登園する。 ・身近な自然やものに触れて遊ぶことを楽しむ。 ・教師や友だちと一緒にいることを楽しむ。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分なりの思いをもって遊ぶことを楽しむ。 ・<u>身近な自然やモノに興味や関心をもち、いろいろなものに気付き、関わることを楽しむ。</u> ・友だちと一緒に遊ぶことの楽しさを感じながら、好きな遊びを楽しむ。
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のクラスがわかり、安心できる場所を見つけて過ごす。 ・身の回りの始末やトイレの使い方、遊んだ後の片付けなど、幼稚園の生活に必要な動きを知り、毎日繰り返す中で身に付けていく。 ・室内や園庭でやってみたい遊びをする中で遊具の使い方や遊び方を知ったり、<u>春の自然に触れたりする。</u> ・教師や友だちとふれあい、安心感をもって行動する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のしてみたい遊びを見つけ、十分に楽しむ。 ・<u>秋の自然をみたり集めたり、遊びに取り入れたりすることに興味をもち、のびのびと表現する。</u> ・同じ場にいる友だちに興味をもち、同じ動きをしたり同じものを使って持って遊んだりすることを楽しむ。

次に3歳児の4月の月間指導計画の中で「教師のかかわり」「環境構成」の中で、自然にかかわる項目の一部を例として以下にあげる(表4)。

表4 3歳児の4月の指導計画の自然との関わりに関する教師のかかわりと環境構成例

教師のかかわり	環境構成
<ul style="list-style-type: none"> ・園庭の飼育動物を子どもと一緒に見たりエサをやったりしながら、安心して子どもたちが動物に親しめるようにする。(4月) ・春の草花や土や水に親しめるように教師も一緒に遊んだり、子どもたちが草花を使ってごちそうを作ったりしているときに、その美しさを認めたりする。(4月) ・保育室にある遊具や外の固定遊具の使い方、飼育動物へのかかわり方を一緒に遊びながら知らせ、十分に親しんだり安全な遊び方に気をつけるようにしたりする。(4月) 	<ul style="list-style-type: none"> ・登園して不安定な気持ちが和らぎやすいように、保育室前に川エビ、メダカ、カメなどの飼育動物を飼い、エサを一緒にやれるようにそばに用意しておく。手乗りセキセイインコを腕に乗せたりできるようにする。(4月)

以上の例から、幼稚園に用意されている自然は、3歳児にとっての保育内容や魅力的な教材である一方で、まだ幼稚園での生活に慣れずに不安を感じているような子どもたちにとっては、心のより所であったり気持ちに安らぎなどを与えるものであることがよくわかる。入園間もない3歳児にとってみればこれから人工物も含めていろいろな環境にかかわり経験を積み重ね学びを深めていくことになるが、その最初の段階で自然の持つ力や不思議さが3歳児の心を捉え、自ら関わろうとする気持ちや態度を自ずと生じさせる力を持つということを保育者は感じているのかもしれない。ちなみに、自然が保育内容や教材として取り入れられているのは4歳、5歳児においても同様である。

2. 子ども理解、目指される子ども像について

子ども理解が保育の根幹をなすのは言うまでもなく、文部科学省が刊行した『幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開』でも、カリキュラムや指導計画の中心に据えられている。子ども理解は、カリキュラムや指導計画は「幼児の実態」に記されるものであるが、本論で用いている指導計画では「教師のかかわり」と「環境構成」にも子ども理解と目指される子ども像が反映されている。

3歳児の4、5月は幼稚園での生活に慣れて、それぞれの子どもたちがいろいろな遊びを見だしその中で安定していく時期である。6月になると、子どもたちの動きが活発になるため、子どもたち自身が生活しやすくなるために生活や遊びのルールの確認も必要になってくるようだ。また、7月の暑さや冬の寒さは子どもたちの生活や行動にも影響が出てくるために、保育者が有形無形に心を砕いていることがわかる一方で、暑い時期、寒い時期ならではの自然とのふれあいやその季節を生かした遊びへの誘いも環境構成から見受けられる。

4歳児、5歳児と年齢を重ねると共に、「教師のかかわり」と「環境構成」に現れている子ども像や目指される子ども像は、子どもの発達を反映している。

以下に、3歳児から5歳児それぞれの月ごとの指導計画の「教師のかかわり」と「環境構成」の一部を掲載する(表5、6、7、8、9)。この際、「ねらい」の「自分のかかわり」「もののかかわり」「人のかかわり」のどれに相当するかは、各項目の文末に記す。以下で取り上げる「教師のかかわり」と「環境構成」は同じ月に取り上げられる項目ではあるが、それぞれの内容は連動していない。(下線は筆者が付した。)

表5 3歳児5月の指導計画における教師のかかわりと環境構成

教師のかかわり	環境構成
<ul style="list-style-type: none"> ・自分の持ち物の扱いについては繰り返し伝えたり、一緒にしたりしながら少しずつ理解できていくようにかかわり、<u>自分のことは自分でできる喜びが味わえるようにする。</u>(自分) ・天気の良い日には教師自身も砂場に入って泥んこになることを楽しむことで、<u>子どもにも汚れることに対する抵抗感が薄れるようにしたり、一緒にまごとをしたりすることで子どもが砂の感触に親しめるようにする。</u>(もの) ・教師も一緒にじっくりと遊びにかかわりながら、<u>子どもが自然に友達や教師のかたまりの中で遊ぶことの心地よさを感じたり、自分のしていることを認めてもらったりする喜びが味わえるようにする。</u>(人) 	<ul style="list-style-type: none"> ・天気の良い日には「オオカミと7ひきのこやぎ」の追いかけて遊ぶのが楽しめるように、オオカミなどの面を用意しておく。 ・いつでもアサガオに水をやれるように、植木鉢のそばにジョウロを用意しておく。 ・色水やまごど遊びで草花にも親しめるように、外のプール付近や水道のそばにテーブルを置き、その上に摘んだ草花(パンジー、ヨモギ、ツツジ、シロツメクサなど)をかごに入れて置いておく。 ・春ならではの生き物に親しめるように、オタマジャクシやメダカなどを飼い、子どもたちが見やすい場所に置く。 ・様々な野菜の生長に親しめるように、保育室前にピーマン、ナス、ミニトマトなどを植えたり、ジャガイモやサツマイモ等の水栽培をしたりしているものを身近に置いたりする。 ・色水遊びで自分が作ったものを大切に持ち帰れるようにビニール袋や名前を書くマジックを用意しておく。

表6 4歳児7月の指導計画における教師のかかわりと環境構成

教師のかかわり	環境構成
<ul style="list-style-type: none"> 子どもたちが進んで片付けようとしている時は、子どもたちに任せ、教師の援助が必要なときには積極的にかかわりながらやり終えたという<u>満足感が味わえるようにすると共に、がんばったことを認めたり褒めたりする。</u>(自分) 遊びの中で子どもたちが見つけたり感じたりした<u>ことに共感し、一つの遊びにじっくりかかわったり友達と相談し合ったりしながら意欲的に取り組んでいる姿を大切に見守る。</u>(もの) 順番を争ったり、順番を競い合ったりして、自分中心な動きをしている時には、<u>最後まで話を聞くことやあわてないで丁寧なことなどの大切さを知らせ、早いことがよいこととは限らないことに気づけるようにかかわる。</u>(人) 	<ul style="list-style-type: none"> 石けんでの泡づくりは、水道の近くで日陰になるところに場所を設置し、ゆったりと遊べるようにする。年少児との自然なかかわりが生まれるような机、道具を配置する。 七夕飾りの時に使えるようにこよりを準備し、こよりを使うことで日本の伝統的な七夕飾りの作り方や雰囲気味わえるようにする。 リズム遊びの音源に親しめるように機会を見つけて保育室に音楽を流すようにする。

表7 4歳児11月の指導計画における教師のかかわりと環境構成

教師のかかわり	環境構成
<ul style="list-style-type: none"> 当番の子どもが楽しみながら野菜を切ってエサをやったり、机拭きをしたりすることができるようにし、<u>自分たちができることは責任を持ってやろうとする気持ちの芽生えを大切にする。</u>(自分) 鬼遊びや伝承遊びなどを通して、<u>多くの友達とかかわっていくことが楽しい</u>ということに気づけるように教師も積極的にかかわったり参加したりする。(ひと) 	<ul style="list-style-type: none"> 自分なりの目的に向かって挑戦しようとする姿が見られる場合は、じっくり取り組めるような時間が持てるようにする。 自然物を身近なものとして触れられるように、落ち葉や木の実を拾ってきて子どもたちの遊ぶコーナーに置いておく。

表8 5歳児7月の指導計画における教師のかかわりと環境構成

教師のかかわり	環境構成
<ul style="list-style-type: none"> <u>生き物の生態や特徴などに関して気付いたり感動したりしていることを一人一人丁寧に受け止めたり、そばにいる友達とのやりとりに広げたりし、自分の思いに自信がもてるようにかかわる。</u>また、<u>友達の思いにふれる面白さが味わえるようにする。</u>(もの) ミニトマトやピーマン、ナス、オクラの水やりなどを通して、<u>野菜の変化などに気付けるような言葉がけをしたり、子どもたちの気付きに共感したりしながら栽培物への興味や関心が高まるようなかかわりをする。</u>(もの) 小動物を見つけたり、栽培物の生長に気付いたりなど発見や感動を伝えに来たときには、共感し、クラスでも紹介する場を設ける。(もの) 	<ul style="list-style-type: none"> 虫かごや虫取り網など、虫取りに必要なものは自分たちで用意できるよう、空き箱、支柱、網状の袋などを用意し、自分たちで作れるようにする。 捕まえてきた虫の飼育の仕方や特性について書いてある本や図鑑を整え、いつでも調べられるようにしておく。

表9 5歳児11月の指導計画における教師のかかわりと環境構成

教師のかかわり	環境構成
<ul style="list-style-type: none"> ・遊びの中で一人一人が継続して自分の課題を見つけ、積極的に取り組み、継続してやり遂げようという気持ちが持てるようにする。(自分) ・子どもたちがつくった遊びのルールやイメージに共感し、子どもたちの思いが実現できるように必要な材料を一緒に探したり遊びを進めたりする。(もの) ・友達と協力して取り組む活動では、一緒に考えたり互いのよいところを見つけたりできるように教師のかかわりを工夫する。(ひと) 	<ul style="list-style-type: none"> ・自然物を使って製作ができるようにボンドや釣り糸、針金、段ボール紙など遊びに必要なものを用意しておく。 ・栽培物の生長を楽しみにできるように、写真や絵を貼ったりジョウロを使いやすい場所に置いたりする。 ・長い物語を読み聞かせるときに、物語のイメージが湧きやすいように絵本の中のカットなどを拡大して貼るなど工夫する。

一部分ではあるものの、3年間にわたる「教師のかかわり」から、3歳児は教師の支えを受けて、幼稚園生活に慣れて、3歳児なりの遊びや生活への取り組みから友達とのかかわり、環境とのかかわりや心を動かすことの芽生えや兆し大切にされていることがうかがえる。そのために、子どもたちが無理なく自発的に環境にかかわることができるような「環境構成」の工夫が見られることがわかった。

4歳児は世界が広がり、まだ未熟な部分もあるものの、いろいろな活動に取り組むことを通して自己を発揮しながら、人とかかわりや生活の仕方において身に付けるべきルールにも気付けるような配慮がなされていることがわかった。

5歳児は、遊びや生活において、自分で自覚的に進めることができる力を育み、遊びにおける学びの点でも深めることができるようになるとともに、それらを友達との間でもよい影響を与え合えるように配慮がなされていることがわかった。

3. 活動を通して育むもの一どのようにして「資質・能力」、「深い学び」にいたるか

活動を考えるもう一つの視点として、「資質・能力」をどのように育てていくのか、そしてその際の教育の方法の「主体的・対話的で深い学び」の形態の一つである「深い学び」が実現されるかということ、保育の計画のなかに反映することができるのかを検証したい。

この幼稚園を含む学校園は幼小中連絡入学生による12年間一貫教育に取り組んでおり、文部科学省研究開発校に指定されている。幼小中一貫の研究課題が設定されており、その観点から幼稚園については3年間を通した活動例が整理されている。これをもとに、活動における子どもの学びについて考えていきたい。

ここで取り上げるのは、5歳児の「ものとかかわり」の中の製作に関する遊びの継続的な変化についてである(表10)。資料からその部分だけ抜き出して以下に記載する。

表10 5歳児の「ものとかかわり」に関する製作活動の継続的な変化

時期	活動名	子どもたちの取り組み
4、5月	製作遊び	自分がイメージするロボットやロケットができるよう、どの素材を使ったらよいか考えたり、素材の組み合わせ方を考えたりしながら作る。
6、7月	製作遊び	ビー玉転がしのコースづくりで、ビー玉が転がっていく様子をよく見たり、コースの傾斜の付け方を考えたりしながら作る。
9月	乗り物を作ろう	イメージする車になるよう素材を工夫しながら作る。
10月	街づくり	自分の街にあるいろいろな建物や建物に関連するものなどを作るために向きや場所、形を考えながら作る。
1、2、3月	乗ってみたい乗り物や行ってみたいところ、住んでみたいお家を友達と作ろう!	作ろうとするものになるように、必要な素材を友達と考えて選びながら作る。

この活動に関して、筆者は「街づくり」中に保育参観したことがある。それも製作中ではなく、画用紙やペットボトル、空き箱などの廃材が用いられて、道路に沿ってビルが建ち並び、そばには牧場やお城が作られており、ある程度街が完成した状態を見せてもらった。したがって、上の製作を伴う一連の活動のほとんどの部分を想像するしかないが、この活動を通して「資質・能力」や「深い学び」について言及するとすれば次のように予想されるであろう。

子どもたちは年少からいろいろな製作に携わり、製作に必要な技術や素材へのかかわり方が巧みになってくる。また、子どもたちが実生活や絵本などを通して、いろいろなイメージも取り込み、そのイメージするものを、それに適した多様な素材を使って形に表す経験を積み重ねてきたであろう。その際、段々に友達と協力したり、友達とアイデアや意見を出し合ったりして共通の目的にむけて一緒に活動に取り組むことのよさや楽しさも感じてきたに違いない。そして、これらの力が、今後も子どもたちの学習を支えると予想される。

こういった点を想定すると、まさに、「資質・能力」の3項目ならびに「深い学び」が実現されていると思われる。したがって、指導計画などとは別に、子どもの活動の成果を連続的に捉える方法も、子どもの学びの軌跡を把握するために有効であると思われる。

4. 考察

指導計画に関する書物は以前から数多く出版されている。特に、今回の幼稚園教育要領の改訂では、カリキュラム・マネジメントが提唱され、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が新たに追加され、保育現場ではこれらに基づくPDCAサイクルへの意識が高まったといえよう。文部科学省も2021年2月に『幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開』を刊行し、指導計画を作成するための基本的な考えや方法を示している。

「ねらい」の設定に関して、手持ちの指導計画に関する書籍（『3歳児の指導計画と保育資料』『4歳児の指導計画と保育の資料』『5歳児の指導計画と保育資料』いずれもGakkenより出版）を見てみると、指導計画の各月の「ねらい」は「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の10項目との関連を考え、最終的にそれぞれの項目につながっていくことを意識した「ねらい」が設定されている。これは検証対象とした指導計画とは異なるものの、ねらいを設定する上で妥当な考え方であると思われる。

ところで、文部科学省は今回の教育要領の改訂では、先にも述べたように、カリキュラム・マネジメントを強調するものの、「幼稚園教育要領」において「各幼稚園においては、教育基本法及び学校教育法その他の法令並びにこの幼稚園教育要領に示すところに従い、創意工夫を生かし、幼児の心身の発達と幼稚園及び地域の実態に即応した適切な教育課程を編成するものとする」と明記している。本論で取り上げた幼稚園のカリキュラム、指導計画では、まず「ねらい」を「自分とのかかわり」「ものとのかかわり」「人とのかかわり」という独自の視点から設定しているところが特徴である。このことより、この幼稚園が長年にわたり積み重ねてきた保育への姿勢を感じる事ができた。そして、何より、この園の特徴は、むしろ各月の指導計画の「教師のかかわり」や「環境構成」に現れる子ども理解や目指される子どもの姿にあると感じられた。つまり、「ねらい」や「内容」に示される内容以上に、「教師のかかわり」や「環境構成」に保育者の子どもの見方と願いが色濃く表れているということは、まさに、子どもの自発性、主体性を重視した教師の保育に対する姿勢の現れといえるからである。

鯨岡（2008）は保育というものは多元的な両義性に貫かれた営みであると説明した。この中には、保育者が目の前の子どもを受け止めつつ、同時に目指す姿を模索する存在であるということも含まれている。筆者はこのことを何の疑いもなく受け入れてきていたが、時には目指す姿を指し示すことが、今ある子どもの姿を否定することにつながるという高嶋（2013）の指摘に、新たな知見を得た。では、目指すべき姿

をどのように見いだしたらよいのか。目指すべき姿は、理想像として最初から存在しているものではなく、子どもと保育者間で探すべきもので、子どもの「なってよかった自分」が目指すべき姿であるという知見も高嶋の指摘から合わせて得ることができた。

この点からいうと、考察に用いたカリキュラムを擁する幼稚園は、今ある姿を受け止めることに重きを置き、目指すべき姿が子どもから生じるのを待ちながら、応援しながら、支えながら保育者がかかわっているという印象を受けた。子どもの変化は一朝一夕に成し遂げられるものではない。この幼稚園のカリキュラムや指導計画の検証を通して、この姿勢こそ子どもの育ちに対する信頼を基盤にした保育のあり方として大事にされるべきものではないかと感じた。

おわりに

今回は主に対象とした幼稚園のカリキュラム、指導計画のみの検証であったため、客観性に欠けるところがある。また、この幼稚園の保育を参観したことはあったものの、計画と実践に関して幼稚園の教師から直接話しをお伺いして理解を深めることができればなおさらよかった。今後はこの点を改めて研究を進めていきたい。

引用・参考文献

- 秋田喜代美（総監修） 2018『3歳児の指導計画と保育資料』Gakken.
秋田喜代美（総監修） 2018『4歳児の指導計画と保育資料』Gakken.
秋田喜代美（総監修） 2018『5歳児の指導計画と保育資料』Gakken.
鯨岡峻 2008「子どもの発達を『過程』として捉えることの意味」『発達』113 18-25頁.
高嶋景子 2013「子どもを丁寧にみるということ」子ども保育総合研究所（編）『子どもを「人間としてみる」ということ』ミネルヴァ書房 167-207頁.
文部科学省 2017『幼稚園教育要領』チャイルド本社.
文部科学省 2021『幼児の思いをつなぐ指導計画の作成と保育の展開』チャイルド本社.

謝辞

カリキュラム及び指導計画を検証することをお許しいただきました幼稚園の皆様にご心より感謝申し上げます。ありがとうございました。